

渋沢栄一ツアー ・ 6

細田木材工業(株)

顧問 細田 安治

◇前号までの渋沢健氏講演では

わが日本国の昭和の時代は、破壊と混乱と繁栄の60年間、次は失われた平成の30年デフレ低成長に苦しみ、2020年令和の時代に入った。少子高齢化が加速するが、日本はアジアの盟主としてIT,AT,ILT等でリーダーシップをとり、若い世代の台頭をサポートして新しい需要を発生させる。インターネット時代に国境はなくすべてが世界と繋がっている。若い世代の台頭で近未来は明るい。

2020年は大きな時代の節目となり、未来は少子高齢化時代に入るが成長は続くとした。

余談だが講師渋沢健氏の講演はさらに続く。講演を紹介していると面白くてやめられないほどだ。

◇2030年に到達目標

遠いところ大目標を定め、バックキャストイング、フォアキャストイング、マーケティングし、新しい価値の創造へ進むことだ。

◇未来は少子高齢化するも成長が続く？

日本近代化社会の歴史は繁栄と破壊を繰り返してきた。明治から大正時代には戦争景気と戦後の不況のサイクル、高度成長から繁栄へ繁栄と破壊を30年毎に繰り返してきた。繁栄を謳歌したが、やがておごりが出て破壊、反省、低迷しながら元号が変わり新しい2020年に入った。ここから、新しい時代にはいる。

◇30年変動の仮説

時代も社会の企業も自然災害も大きく俯瞰すれば30年サイクルで循環している。個人もしかり伝統工芸の技術、医学の進歩、学者の研究、研究者の開発、人間の一生の構成も30年説が当てはまる。この「仮説30年変動説」をいつか実証しようと努めているが、テーマが遠大すぎて、手を付けては頓挫、挫折を繰り返しているがいつかは難題を極めて発表したいと年甲斐もなく大望を抱いている。

◇2020年大きな時代の節目

1990年バブル崩壊しそのまま平成に突入、この時の人口構成は瓢箪型であった。このひょうたんがそのまま2000年にスライドし、高齢化だが元気な老人が活躍する社会変革のスピード感早まる瓢箪がそのまま上に進む。平均寿命64歳、人生は100年時代となれば、元気な老人の活躍と、前号からの繰り返し紹介している主役の団塊ジュニアが活躍する。

◇人材育成

人間をつくる事。世代間格差、教育格差を防ぐため若い世代の教育のスイッチを入れることである。人材がすべてと考えてよいのではないか。

筆者の持論として常に頭にあるのは、日本人の語学力の貧弱さである。海外に行くと欧米は当然のこと、東南アジア、中南米はもとより、中国の奥地に入っても英語が通用する。こちらは和民族日本人

と・・・ていても、片言英語が通じない。まったく情けない話である。木材の専門用語などは通じなくても目視で分かるが、肝心の会話が通じない。オットこれは筆者だけの問題だろうか。

日本の未来はグローバル的發展を遂げなければならない。国内産業育成、インナーマーケティングそしてイノベーションを起こし、業態変更で更なる發展が最優先課題だが、グローバルな市場へコマを進めねばならない。それには、先ず語学力を身に着けねばならない。そこで気が付いたのが、日本経済新聞の私の履歴書のなかで、一橋大学教授野中郁次郎先生の履歴書が掲載された。

野中郁次郎先生は、実は筆者のでた都立三商の新制高校時代の2年後輩であった。在籍中はすれ違いで、面識はなかったが富岡八幡宮の崇敬会副会長と同期だったことから紹介され、先生の履歴書を読み返した。

ご紹介すると、先生は墨田区の縫製工場の次男坊、親は職人氣質で極めるのが自分の仕事としていた。プロ野球巨人の王貞治とは草野球仲間、商人になれと三商へ入った。商業へ入ったが珠算と簿記が大嫌いで、卒業試験で不合格となったが、なぜか英語が得意で、親父の職人氣質の血を受け継ぎ何事かを極めてやろうと、英語に夢中になり大学を英語で早稲田の政治経済学部へ入学した。

早稲田時代は英語で夢中、瞬く間に過ぎ卒業就職となった。富士電機製造㈱に入社、様々な仕事に携わり、営業の企画マーケティングを担当、米国で留学経営学を学ぶ。

米カリフォルニア大学パークレー校マーケティングから、ハーバートサイモンの組織論にはいる。

サイモンとは近代経営学の祖と呼ばれ、「経営は意思決定の科学的プロセスである」人間の価値観を除外する。人間の情報処理に限界があり、完全に合理的になれないが、ある限定された範囲内でなら客観的に判断できる。可能にするには組織論だと論じている。消費者の意思決定論を学んだ。

◇渋谷栄一ツアーが横道に入ってしまったが

栄一の言う日本を背負って立つ若者には正しい教育をとの精神に通じていること。世界語として英語は日本人の必修科目。英語ありせば日本の未来は大きな夢をもって進むことができると強調する。

◇世界人をつくる教育

世界中の若者を相手にする時代がやってくる。そこで、新しい時代に対応できる人間を育てることだ。巷間言われているように、日本人は英語力が弱く海外で、あるいは国内で来訪する外国人相手はやはり英語でないと通じない。この点東南アジア、中国などでは、奥地へ行っても英語は世界語として通用する。日本人は残念ながらそこまで言っていない。まずこのスタートから、外国人に負けている。

◇英語力

「世界で活躍できる若者を育てるには英語をしっかりと学ばせねばならない」何としても日本人の若者の英語教育に力を入れるべきだ。栄一は若くして学問を志し東洋の学問は孔子を筆頭に諸学問を極めたといわれる。栄一の人物を作り上げた基礎は少年時代の五書六経を取めたからと伝えられているがまさにその通りである。

ここで紙数が尽きた。今回は野中郁次郎の言葉を借りて教育の更なる必要性を述べる。

続く